

インテルステノ 2013 会議報告

河原達也 (京都大学)

インテルステノ(Intersteno)は、「高品質なテキストを迅速に生成するための様々な高速筆記法を使う者」の世界的なコミュニティである(公式Webサイト <http://www.intersteno.org/>の“Mission-History”のページより)。1887年に主として職業速記を対象に設立されたが、「前世紀の技術・社会の変革に対応してきた」とも記されている。2年に1回のペースで大会(Congress)が開催されているが、2013年7月にベルギー・アントワープで第49回の大会が開催された。我が国からは、日本速記協会の兼子次生理事長、衆議院記録部の武藤ひろみ、稲吉明子の2名、そして河原の計4名が参加した。米国・スタンフォード大学の井上美弥子准教授も共に参加した。この大会のメインイベントは速記・速タイプの競技会であるが、日本からの競技参加者はなかった。

本稿では、大会の会期中に行われた会議について簡潔に報告する。会議には、議会記録者を中心としたIPRSセッションと関連話題全般を扱う一般会議(General Conference)がある。各々について以下にまとめるが、著者のメモ・記憶に基づいているため、一部に主観的・不正確な点がある点ご容赦頂きたい。なお、IPRSセッションの一部については、「日本の速記」11月号に武藤・稲吉両名による詳細・忠実な報告があるので、参照されたい。

1. 議会等の記録者部会 (IPRS セッション) の話題

議会関係では、トルコ議会、フィンランド議会、イギリス下院、オランダ議会から報告があった。トルコ議会では現在も手書き速記を用いているが、他の議会ではこの二十年の間に録音書き起こしの方式に移行している。また、審議映像のインターネット配信も幅広く行われているようである。

このように情報通信技術の導入が進むにつれて、各国に共通して、2つの問題が浮かび上がってきている。1つは会議録作成規範の問題であり、特に映像・音声中の発言と会議録のテキストに齟齬が生じるために顕在化している。議会会議録は文法的正しさや読みやすさが重視され、映像の忠実な字幕とは本質的に異なるという認識があらためてなされている。ただし、発言者が事実や引用などを言い間違えた場合に訂正するか否かについて、フィンランド議会の報告で提起され、小部会でも様々な議論が行われたが、各国で対応が異なるようであった。

もう1つの問題は、速記を用いない記録者の採用・養成をどのように行うかである。志望者を募った上で、経験を積んだ者(速記者世代)が教育係になってマンツーマンで指導することが多いようであるが、イギリス下院ではロンドンシティ大学の協力の下で議会記録者を養成する専門職大学院(修士号)のコースを2012年に設置した。初年度は約800名もの応募があり、書類選考・筆記試験・面接を経て4名を採用し、このほど無事修了したとのことである。体系的なカリキュラムは参考になるのではないだろうか。

オランダ議会では、記録部が中心となって先進的な情報通信技術を用いたシステム(VLOS)を設計・導入している。同議会では、かなり発言が自由にできるようなので、誰がいつ発言したかを正確に記録することが重要であり、議場にいる臨場者が議員の顔写真付きデータベースからクリックすることで、逐次デジタル記録されるようになっている。その情報に基づいて発言者毎に音声ファイルが自動生成され、それを元に会議録を作成する流れになっている。トルコ議会でも不規則発言が多く、それをどのように記録するかが難しいと述べていた。

会期中に IPRS 主催でブリュッセルにある欧州議会の見学があった。欧州議会でも、オランダ議会と同様のシステム(CARTON)が導入されており、発言毎に発言者・役割(理事・議員など)・言語(24ヶ国語)の情報がメニュー選択により記録されるようになっている。ただし欧州議会では、会議録作成担当の正規職員は6名しかおらず、外部契約の速記者が実質的に記録作成を行っているようである。以前は他言語への翻訳を行っていたが、経費と時間がかかるために廃止になった。ただし映像配信の方には、各国語のリアルタイム同時通訳の音声が付加されており、言語を切り換えることが可能である。なお、音声認識は容易でないとのコメントであった。言語が多いことと母国語でない発言も多いためと思われる。

IPRS セッションでは、米国の裁判所関係の報告もあったが、情報通信技術の導入が進む反面、予算や人員は削減される一方なので、外注が多くなり、将来的には映像や音声を正式な記録とすることも可能性として考えられるとのことであった。

IPRS セッションの講演スライドは、<http://iprs-info.org/downloads.php> からダウンロード可能である。

2. 速記全般 (General Conference) の話題

速記や最近の高速筆記法に関する様々な紹介があった。

米国の Dominick Tursi 氏からは、速記博物館 (Gallery of Shorthand; <http://www.galleryofshorthand.org/>) の紹介があった (IPRS セッション)。これは、ニューヨークのロングアイランドの連邦地方裁判所内に設置され、古代から現代に至るまでの様々な筆記の歴史や速タイプに関する展示があるとのことである。同氏は約1時間にわたって、速記の歴史に関して熱弁をふるい、大変印象的であった。レジメが <http://iprs-info.org/presentations/tursi2013.pdf> にあり、講演ビデオが、<http://iprs-info.org/iprs2013ghent.php> において視聴できる。

アルゼンチンの Jorge Bravo 氏からは、アルゼンチン議会図書館における世界中の速記に関する文献の収集とデジタル化の事業について報告があった。兼子理事長の方からは、日本における速タイプの歴史に関する講演をされた。

米国・NCRA/NCRF の Jim Cudahy と Karen Yates の両氏からは、退役軍人の伝承の口述筆記を行うプロジェクトについて報告があった。河原の方からは、インターネットで配

信されている講義コンテンツに対して音声認識を用いて字幕付与を行うプロジェクトの紹介を行った。

米国・NVRA の Linda Drake 氏からは、ボイスライティングの実演が披露された。これは市販の音声認識ソフトを用いて復唱入力するものである。驚異的な速度で発話が行われ、正確な記録が作成されていた。

IPRS セッションを含めた3日間の会議を通して、全講演に対してリアルタイム字幕が Infinity (米国) と Velotype (オランダ) によって付与された。1人で30分程度の各講演を担当していた。著者が講演した際に、私の英語がきちんと通じているのか不安であったが、途中で1か所ジョークを言ったところ一応受けていた。

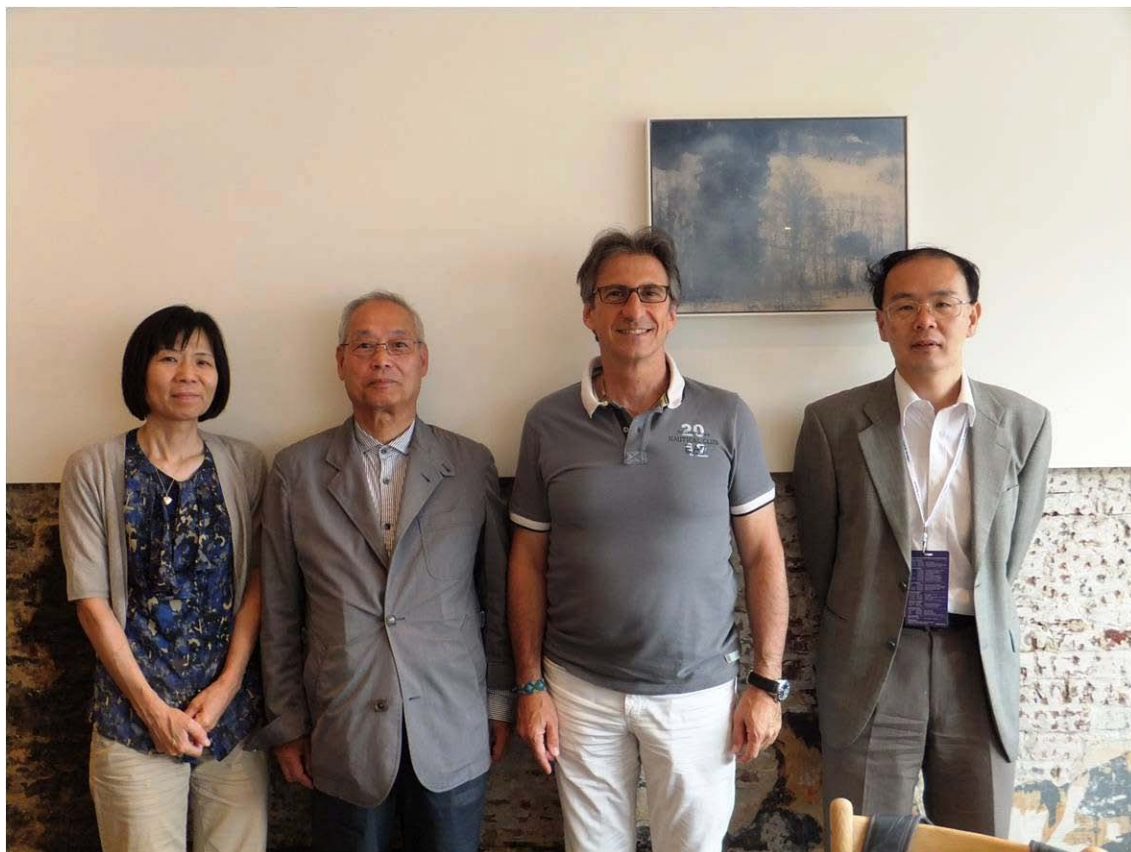


写真は著者の講演の様子 (右がリアルタイム字幕付与)

3. 大会全般の印象

2009年の北京大会、2011年のパリ大会に続いて3回目の参加となり、大会の雰囲気になじめるようになった。速記・速タイプの競技を通じた発展・継承とともに、新しい技術・応用の積極的な模索を行っている。参加者の言語も文字も文化も様々であるが、発言を記録にする(そして後世に残す)という人類共通の長年の課題に関して、抱える問題やアプローチには類似の点があり、その認識を新たにするだけでも参加の意義はあると思われる。

しかしゲントの一番の印象は、古い建物と運河が調和した美しい街並みとおいしいビール・ムール貝ではなかろうか。会場が、我々の宿泊していたホテルと遠く、帰りは30分くらい歩く必要があったが、今ではその散歩（とその後の乾杯）がよい思い出である。



インテルステノのラモンデリ会長と懇談